

ユネスコスクール活動事例集

第 6 集

目次

特集 ESD活動支援・協力団体紹介	2	
ユネスコスクール 活動事例①	名古屋市立桶狭間幼稚園	4
ユネスコスクール 活動事例②	一宮市立中島小学校	6
ユネスコスクール 活動事例③	豊橋市立野依小学校	8
ユネスコスクール 活動事例④	豊橋市立老津小学校	10
ユネスコスクール 活動事例⑤	岡崎市立城南小学校	12
ユネスコスクール 活動事例⑥	半田市立亀崎中学校	14
ユネスコスクール 活動事例⑦	豊橋市立前芝中学校	16
ユネスコスクール 活動事例⑧	愛知県立千種高等学校	18
ユネスコスクール 活動事例⑨	愛知県立刈谷北高等学校	20
ユネスコスクール 活動事例⑩	名古屋市立名東高等学校	22
ユネスコスクール 活動事例⑪	日本福祉大学付属高等学校	24
ユネスコスクール 活動事例⑫	豊橋市立くすのき特別支援学校	26
愛知県ユネスコスクール交流会	28	

はじめに

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、昭和28(1953)年に創設された、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育、といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校です。平成30(2018)年10月現在、世界182か国で11,000校以上のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、1,116校を数えます。愛知県では、平成26(2014)年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、現在申請中を含め168校が活動しており、国内最大規模となっています。

愛知県教育委員会では、本年度、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業及び加盟支援事業を実施いたしました。具体的には、児童・生徒・学生・教職員等が交流し、学び合う「ユネスコスクール交流会」の開催を始め、ユネスコスクールへの研修講師派遣、全国大会等研修会への教職員派遣、加盟申請に係る英訳支援等です。また、ESDの重要性を理解し、ESDを実践できる教職員の育成を目指し、管理職・ESD実践担当者等を対象とした研修会も今年度新たに実施いたしました。

さて、今年度は、7月の西日本豪雨、記録的な猛暑や脅威的な大型台風が日本列島を襲いました。世界でも、記録的な熱波や豪雨、ハリケーンなど異常気象が頻発しています。また、世界の飢餓人口は、長引く地域紛争と気候変動により増加が続き、2017年には8億人を超えています。住みやすい地球、住みやすい社会を次の世代にどう引き継ぐべきか、国連は、2015年に持続可能な世界の実現を目指して「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」を策定し、現在では、経済界もSDGs達成に向けて変革を遂げつつあります。

2020年度から小・中・高等学校にて順次全面実施される学習指導要領の前文及び総則においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が盛り込まれ、各教科指導においては、ESDの視点での授業改善が必要とされています。ESDを実践するに当たり、SDGsは、地球規模の課題を日常生活と結び付けて考えるのには格好のテーマです。SDGsに基づいたESDを実践することにより、未来につながる「正解のない問い」に対して「Think Globally, Act Locally」が推進されることを願っています。

本事例集は、県内各地でESD活動に取り組むユネスコスクールの実践をまとめたものです。ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるとともに、未来を担う子供たちの学びに向かう力を育むきっかけとなることを願っております。

結びに、本事例集作成に当たり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、そして関係市町村教育委員会を始めとした関係の皆様にご心より感謝を申し上げます。

平成31(2019)年3月

愛知県教育委員会

特集 ESD活動支援・協力団体紹介

各学校のESD活動の促進及び支援をする団体を紹介します。

ESDコンソーシアム愛知

愛知県の教育機関、産業界、市民団体が、持続可能な開発のための教育（ESD）を推進するための組織です。愛知県の学校教育の場を始めとして、一般社会の様々な場面で支援を行っています。

各校種並びに地域の特長を生かしたESD活動の展開と定着に向けた、ESD活動を支援する組織の構成と連携についての基盤を形成します。

- 国内外のユネスコスクールとのESDの相互交流
- ユネスコスクール以外の学校でのESD活動の実施
- 社会教育施設、青少年教育施設等との連携
- 活動の成果を共有するための発表会開催
- 都道府県教育委員会との連携
- コンソーシアム機能を継続するための計画策定

住 所：〒460-0012 名古屋市中区千代田5-14-22 中部大学名古屋キャンパス
連絡先：TEL 052-521-8566 FAX 052-251-8566
H P：http://esd-aichi.com

中部地方ESD活動支援センター

ESD活動支援センターは国内に8ブロック設置され、中部地方センターは中部7県を対象に各地域のESDの取組をつなぎ、他地域、全国、世界と連携し、それぞれの実践がより豊かになるようにサポートします。

- 情報収集・提供
各地のESD活動取材し、地域のESD情報を発信します。
- コンサルティング
ESD実践に関するお悩みや課題の対応、マッチング、講師や教材を紹介します。
- 学びあう場づくり
発表会、ワークショップを実施します。こんな企画をしてほしい、こんな講師を紹介してほしいなどニーズに応じて企画します。

住 所：〒460-0003 名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル4階
連絡先：TEL 052-218-9073 FAX 052-218-8606 メール office@chubuesdcenter.jp
H P：https://chubu.esdcenter.jp

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

ACCUはユネスコの基本方針に沿ってアジア太平洋地域と日本国内で教育と文化の分野で活動しています。教育分野では、ユネスコスクール・ESD関連事業を始め、識字教育支援や地域開発、教職員国際交流、高校生のための模擬国連など、多彩な事業を展開しています。

- ユネスコスクール事務局
文部科学省の委託を受け、事務局として質の高いユネスコスクール活動や国内外のユネスコスクールネットワーク強化のために様々な支援を行っています。公式ウェブサイトの運営や各種研修会などを通じて、学校で取り組めるプログラムを提供しているほか、近年は、ESDがより広く浸透することを目指し、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会が発行した「ESD推進の手引（初版）」を用いて、各地の教育委員会と連携した研修会などの実施実績もあります。

住 所：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32-7階 出版クラブビル
連絡先：TEL 03-5577-2851（代表） FAX 03-5577-2854
H P：https://www.accu.or.jp

中部ESD拠点 (RCE Chubu)

中部ESD拠点 (RCE Chubu) は、国連大学の認定を受けたESDの地域拠点 (世界166地域) の一つです。活動対象地は愛知県・岐阜県・三重県にまたがる「伊勢・三河湾流域圏」。中部ESD拠点協議会には、現在、ESDを推進する78団体 (教育機関、NPO、行政機関、企業など) が加盟しています。ESDやSDGs (持続可能な開発目標) を地域で実践するための情報交換や連携活動を推進しています。

住 所：〒487-8501 春日井市松本町1200 中部大学国際ESDセンター内中部ESD拠点事務局
連絡先：TEL 0568-51-4736 FAX 0568-51-7618 メール office@chubu-esd.net
H P：http://chubu-esd.net

名古屋ユネスコ協会

途上国の教育支援活動「世界寺子屋運動」の書き損じはがき回収やチャリティー活動、ユネスコスクールのESD活動を進める「ESDパスポート事業」、南山大学とのコラボで平和を市民とともに考える「平和セミナー」、学校への出前授業とユネスコ学習の受入れなどを実施。また、青年部若鯨組は小学生の異文化理解のための「世界の遊び」、高校生のための「留学生との集い」などを開催しています。

住 所：〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-39-23 ライフコア那古野1階
連絡先：TEL 052-583-6662 メール nagoya@unesco.or.jp
H P：http://www.unesco.or.jp/nagoya/

豊橋ユネスコ協会

地域の小、中、高校を対象に、かつての「軍都豊橋」の軍施設であった豊橋公園に残る第18連隊の「戦争遺跡マップ」、及び現在の愛知大学を中心にあった第15師団・予備士官学校などに関する「豊橋南部地域戦争遺跡マップ」による見学会や、豊橋空襲など戦争体験を基にした平和学習を内容とする出前授業。その他国際理解、異文化交流を目的とした国際料理教室などの出前授業を実施。東三河地域のユネスコスクールにおけるESDの取組の成果を地域で理解し、支援することを目的としたフォーラムの開催や写真パネルの展示会の企画、実施を行っています。

住 所：〒441-8522 豊橋市町畑町1 愛知大学豊橋校舎校友室内
連絡先：TEL 0532-47-4143 FAX 0532-47-4145 メール toyohashi_unsc@yahoo.co.jp
H P：http://www.unesco.or.jp/toyohashi/

独立行政法人国際協力機構中部センター (JICA中部)

政府開発援助 (ODA) の実施機関として、開発途上国での国際協力の経験や知見を日本の教育現場に役立てることを目的に、児童・生徒、教員向けに開発教育・国際理解教育支援事業を行っています。体験型施設なごや地球ひろばで、持続可能な開発目標 (SDGs) や国際協力について学ぶ「訪問プログラム」、JICA海外協力隊経験者等による「国際協力出前講座」、国際理解教育の理念やアクティブラーニングの手法を学ぶ研修等を実施しています。

住 所：〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7
連絡先：TEL 052-533-0220 FAX 052-564-3751 メール jicacbic@jica.go.jp
H P：https://www.jica.go.jp/chubu/

環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

名古屋市立桶狭間幼稚園



創 立：1965年

住 所：〒458-0918 名古屋市緑区南陵102番地

連絡先：TEL 052-621-6018 FAX 052-622-6098

学級数：5 園児数：106人

H P：http://www.okehazama-k.nagoya-c.ed.jp

つなぐ 育む 豊かな心 —地域との関わりを通して—

はじめに

本園は、近くに歴史的にも有名な「桶狭間の戦い」が450年前に行われた桶狭間古戦場や、絞りで有名な有松の町があり、歴史と伝統文化を身近に感じられる地域にある。

また、園の周りには、まだ豊かな自然が残っており、子供たちが自然に触れる機会も多くある。

2014年にユネスコスクールに認定され、「人との関わり」「地域との関わり」「自然との関わり」の三つの視点からESD活動に取り組んでいる。

今回は、歴史と伝統文化が身近に感じられる地域の特色を生かし、「地域との関わり」で取り組んできた活動事例について報告する。

実践内容①

「有松絞りのTシャツを親子で作ろう」(5月)

ねらい：地域の人に教えてもらい、親子で絞りTシャツを作る中で、地域の伝統工芸に触れる。

5歳児は園外保育や運動会などで着る絞りTシャツを、地域の方の指導を受け、親子で作った。これは毎年行っており、絞り体験は子供にとっても、保護者にとっても「大きい組になったら絞りTシャツが作れる」と期待に胸膨らませて参加する行事となっている。Tシャツを絞る方法は、5歳児でも保護者と一緒に絞ることができるよう、スーパーボールを包み輪ゴムで止めたり、ビニルひもを巻いたりという簡単な方法で行っている。絞りながら「ここはグルグル巻きにしよう」「どんな模様になるか楽しみだね」などと親子で話しながら、一緒に考えたり、工夫したりして模様を作っていく喜びを味わうことができた。その後、染色する、輪ゴムやひもをほどくという絞りを作る過程を体験し、世界で一つしかないTシャツを作り上げた。



かっこいいTシャツができたよ！

成果

地域の方と絞り体験を行うことで、地域の伝統文化に触れ、興味をもつことができた。また、親子でデザインや絞り方を考えTシャツを作る中で、自分なりの表現を楽しむことができた。3・4歳児が5歳児の絞り体験を見学することで、「絞りTシャツを作りたい」という期待につながっていると考える。

実践内容②

「地域のおまつりに参加しよう」(5月～6月)

ねらい：地域の行事に参加し、地域の歴史や文化に興味をもったり、認められて自信を付けたりする。

有松絞りまつりと桶狭間古戦場まつりに、5歳児は絞り体験で作ったTシャツを着て、毎年参加している。この舞台上で踊る『獅子の舞』は代々5歳児に引き継がれており、子供たちは年間を通して、繰り返し踊ることを楽しんでいく。5歳児は祭りに向け、園庭で学年全員で踊る様子を3・4歳児から認められ自信を付けていった。祭り当日は、緊張しながらも、手足の屈伸を意識しながら、伸び伸びと笑顔で元気よく踊ることができた。また、有松絞

りまつりでは、有松の古い町並みを見学した。山車飾りの見学では、からくりの動きに興味をもって見たり、気付いたことや面白いと感じたことなどを友達同士で教え合ったりしていた。



みんなで“獅子の舞”を踊ったよ

成果

地域の行事に参加することは、地域の歴史や伝統・文化に親しみ、それを受け継いでいくという気持ちの芽生えを培う経験となった。また、様々な心を動かす直接体験が豊かな感性や表現力を育む貴重な機会となった。

実践内容③

「桶狭間太鼓・甲冑かっちゅう試着体験」(11月)

ねらい：地域の人と触れ合う中で、地域の人への親しみや、大切にされているうれしさを感じる。

桶狭間太鼓の方に幼稚園に来ていただき、演奏していただいた。子供たちは迫力ある演奏を間近で聞くことができ、思わず立ち上がる子も出るほど、夢中になって演奏を聴いていた。演奏会后、5歳児は和太鼓体験を行った。和太鼓を打つのは初めてという子供も、やさしく丁寧に教えてくださる地域の方のおかげで、思い切り太鼓を打つことを楽しんだ。翌日、保育者が段ボール箱などで作った太鼓を用意しておく、どの学年の子供たちも、桶狭間太鼓の方と同じように演奏しているつもりになって、繰り

返し打つことを楽しんでいた。

演奏会の後、5歳児が甲冑試着体験を行った。桶狭間古戦場保存会の方に優しく手伝ってもらいながら、甲冑を一つ一つ身に付けていった。桶狭間の戦いで戦った武将たちも同じ甲冑を着ていたことを聞いたり、疑問に思ったことを教えてもらったりした。



桶狭間太鼓の人みたいに打てるよ

成果

地域の方の温かさに触れることにより、親しみを感じて、自分から話し掛けたり、相手の話を聞いたりすることができた。また、発達に応じて体験したことを再現できる環境を整えたことで、その年齢なりの表現を楽しむことができた。

おわりに

本園では、地域の行事や文化に触れる機会を教育課程や指導計画に位置付け、体験を積み重ねるようにしている。地域と連携した豊かな体験は、ESDの理念に基づく「持続可能な社会づくりの担い手」を育むことになる。また、幼児が地域との関わりを深めることは、幼児が人や地域とのつながりを感じ、地域の一員として地域の歴史や伝

統をつないでいく気持ちや、心を動かし様々な表現を楽しむ豊かな心を育むことにつながると考える。

今後も、子供、保護者、地域とのつながりを大切にしながら、体験を通して幼児の豊かな心、地域の伝統への誇りや愛情の芽生えを育ていけるよう保育に取り組んでいきたい。

環 境	国際理解
地域文化	気候変動
生物多様性	防 災
エネルギー	そ の 他

一宮市立中島小学校



創 立：1907年

住 所：〒491-0362 一宮市萩原町西宮重中光堂850番地

連絡先：TEL 0586-28-8722 FAX 0586-69-0102

学級数：14 児童数：330人

H P：http://www.school.city.ichinomiya.aichi.jp/nakasi-e/

自然がいっぱい みんなが笑顔の中島小

はじめに

一宮市の最南部に位置する本校周辺には、豊かな自然が残り、また、学校敷地内にも植物が数多く生育している。このような環境の中で、子供たちが自分たちの住んでいる地域の自然について知り、愛することができるようになれば、今後、自然と協調して生きようとする子供が育成され

ると考えている。そこで、敷地内にある「トンボ園」を活用した環境学習を行うこと、「にこにこ畑」を活用した栽培活動を行うことを通して、自然を愛し、みんなが笑顔の中島小っ子の育成を目指して実践している。

実践内容①

「トンボ園を利用した活動」

ねらい：トンボ園にあるビオトープを観察することで自然に関する関心を更に高める。

中島小学校の中庭には、「トンボ園」がある。これは、平成12年に当時の3年生が「学校の中に生き物が集まる池を作りたい」という思いを実現させたものである。ビオトープ管理士の方を講師に迎え、池作りを行った。3年生の児童が中心となって作業が進められ、全校児童がビオトープ作りの作業に関わった。それ以降、トンボ園を利用して様々な活動が行われている。

低学年は、ビオトープに集まる昆虫を捕まえたり、池で生き物を観察したりしている。特に1年生において、池作りのときにお世話になったビオトープ管理士の方を講師にお招きし、「生き物観察会」を行っている。池や草むらに生息する生き物を見つけ、直接手で触れ、観察することができ、子供たちは笑顔で活動することができた。また、3年生において、「トンボ教室」を行っている。ヤゴの生態について学習したあと、学校プールやトンボ園の池に生息するヤゴを捕まえて飼育し、成虫にして自然にかえすことをしている。

高学年は、写生会のときに絵を描いたり、理科の時間に自然観察をしたりすることで活用している。また、休み時間になると、友達とおしゃべりをするなどして過ごす場としても活用している。



トンボ園で観察する子供たち

成果

「トンボ園」は、自然と触れ合う場として中心的な存在となっている。生き物を実際に手に取り観察することで自然を大切にする心が育成されているのが大きな成果と言える。また、休み時間にも多くの子供たちがトンボ園に集うことから自然を愛する子が育成されていると考える。

実践内容②

「にこにこ畑を利用した栽培活動」

**ねらい：異学年ペアでの栽培活動を行うことで
自然に親しむ心を育てる。**

平成23年度より、地域の方の御厚意で、学校西側に「にこにこ畑」を貸していただき、サツマイモの栽培活動に利用している。4月には、畑の耕しから土作り、畝作りまでを地域の方をお願いしている。そして、マルチシートかけや夏場の除草活動、収穫前のつる切りでは、子供たちだけではなく保護者ボランティアの方にも参加をいただいて実施している。苗植えや水やり、収穫のときには、1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生がペアとなっている。高学年が苗の植え方を低学年に優しく教え

ている様子は大変ほほ笑ましい。また、収穫の際に大きなサツマイモが採れると大きな歓声があがり、自分たちで栽培した作物の収穫を喜び合う様子が見られる。毎年、全員が数本のサツマイモを家に持ち帰ることができ、家庭での話題の一つとなっている。



サツマイモの収穫

成果

サツマイモの栽培に異学年ペアで携わることで、育て・収穫する喜びを味わい、自然に親しむ子供を育成することができた。また、地域と学校が協力してサツマイモの栽培活動に取り組むことができたのも大きな成果と言える。

実践内容③

「学校行事と関連付けた栽培活動」

**ねらい：卒業式、入学式の会場に飾る花を育て、
在校生としてお祝いする気持ちを高める。**

学校行事の中でも儀式的行事である入学式や卒業式は大変重要な行事である。節目の行事であるとともに、子供たちの成長を祝う行事でもある。その行事を全校児童が何かしらの方法で関わることは大切である。そこで、本校では、式の会場を飾る鉢花を栽培する活動「一人一鉢」に取り組んでいる。12月初旬にパンジーの苗を鉢に植える。この際、異学年ペアで協力して行う。高学年が低学年に土の入れ方や苗の植え方などを教えながら作業を進める姿は見ているとほほ笑ましい光景である。その後、

自分で植えた鉢花のお世話をし、3月には、立派な鉢花となる。

卒業式や入学式の会場いっぱいにおかれた色とりどりのパンジーは、卒業する6年生や入学する新1年生、そしてその保護者にとっては大変思い出に残るとともに、全校児童のお祝いの気持ちがこもったものとなっている。



ペアで行う一人一鉢

成果

活動を終了した子供の感想からは、自分たちで苗を植え、育てた鉢花が式の会場を飾るのは、とてもうれしいという声をたくさん聞くことができた。行事と関連付けた栽培活動を通して、感謝やお祝いする気持ちが高まったと考える。

おわりに

本校では、紹介した活動以外に「ヤゴ救出作戦」「緑のカーテン実験」「米作り」「親子芋掘り体験会」など、様々な実践を行っている。こうした活動を通して、大人になっても植物など自然を愛し、緑を大切にすることを心を持った子供を育成していきたいと考えている。

今後の課題として、これまで行われている活動を形骸化

しないことが重要であると考えている。そのために、どうしてこの活動を行っているのか、職員が十分に理解するとともに、子供たちが活動のねらいを把握できるように指導していきたい。そうすることで、自然を愛する心が育った子供たちが育成できると考えている。

環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

豊橋市立野依小学校



創 立：1873年

住 所：〒441-8124 豊橋市野依町諏訪125番地

連絡先：TEL 0532-25-2186 FAX 0532-44-3064

学級数：17 児童数：490人

H P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/noyori-e/

地域を愛し、ともに生きる野依っ子

はじめに

本校区は、ハウス園芸中心の農村地域である一方、バイパス野依インターの完成を受け、工業団地や住宅団地が造成された。また、リハビリ病院や授産所などの高齢者・障害者施設が併設された福祉村や、平成27年開校のくすのき特別支援学校も置かれている。校区内は主に、歴史のある町、戦後の入植者により開拓された町、平成になって

新たに生まれた町の異なる3町に分かれており、歴史や文化も様々である。そこで、町や施設の「ひと・もの・こと」と深く関わる学習を展開し、互いの住む町や施設の良さ、大切さに気付かせたいと考えた。人とつながる喜びをかち合う体験を通して、校区を愛し、大切にしていこうとする態度を育てていきたい。

実践内容①

「校区の人と関わる一水稻栽培」(5年生)

ねらい：校区の老人会と連携し、水稻栽培をすることで、先人の知恵を知り、稲作に関わる見識を深める。

5年生は例年、校区の老人会の方に、田植と稲刈りを体験させていただいている。今年の田植は、5月9日に行った。老人会の方から「日本で二千年以上続く稲作」というお話をいただき、子供たちは「自分たちで米を育てる。」という自覚を新たに、一人一人素足で田んぼに入り、苗を植えていった。初めての泥の感触に、初めは「気持ち悪い。」と言いつつも、田植が終わると「楽しかった。」とつぶやく声が多く聞かれた。

子供たちの「自分たちで米を育てる。」という思いを大切に、田植後の稲の成長や育て方等をインターネットや図書資料で調べる活動を行った。総合的な学習「野依お米プロジェクト」として33時間の単元を組み、活動を行った。



校区の方に見守られながらの田植体験



8月の出校日には、老人会の方に教えてもらいながら、スガイ作りに挑戦した。

9月11日、稲刈りを体験した。

10月11日、25名余りの老人会の方を招待し、収穫できた喜びと、支援して下さった方たちへの感謝の気持ちを伝える「収穫感謝祭」を開いた。当日は、子供たちと保護者10名のサポートで、新米で作ったおにぎりのみそ汁を準備した。会食では、老人会の方から昔の野依の様子などを話していただき、楽しい時間を過ごすことができた。その後、実行委員が計画した「お米クイズ」を楽しみ、子供たち全員が作った手作りのおまもりをプレゼントとして手渡した。

成果

稲作体験から、ふだん口にしているお米に対する意識が変わったことを感じた。老人会の方々とともに活動する中で、田植や稲刈りの方法だけにとどまらず、先人の知恵や稲作に関わる風習、お年寄りと交流する喜びを感じることができた。

実践内容②

「校区の施設の人々と触れ合うーわくわくタイムー」

ねらい：くすのき特別支援学校の同学年の友達と触れ合う中で、互いを尊重し合う態度を育む。

本校は、徒歩4分の場所にある、くすのき特別支援学校と、年3回の交流会を学年ごとに実施している。また、交流後は活動内容や感想を便りにまとめ、発行している。

本年度の1～3年生は、主に「互いを知り、楽しく遊ぶ活動」を中心に行った。ダンスや、ゲーム（「もうじゅうがり」「おふろでぴかぴか」など）を行う中で、「友達になれてよかった。」「また遊ぼうね。」といった声が上がった。また、くすのき特別支援学校の校舎を見学し、点字ブロックや掲示物の見やすさなど、障害をもつ子が安全で快適な生活をするために必要な設備があることに気付くことができた。

4年生は、『『してあげる』から『いっしょにやろう』へ』をテーマとして取り組んだ。4月に福祉村の方を招き、福祉について学習を行った。福祉とは、「誰もが幸せに生きること」であると知り、「幸せ」について追究していった。子供たちの考える幸せは、家族や友達がいることや平和で安心して暮らせること、ゲームで遊ぶこと、おいしい物を食べられることなど、いろいろであったが、それら全てが「笑顔」につながっていくことに気付いた。また、「誰もが」という言葉に着目し、アイマスク体験や妊婦体験などを行い、様々な立場に立って考える必要性を見いだすことができた。子供たちは、「わくわくタイム」を、更に笑顔あふれる交流にするために、福祉の考え方を基にして話し合い、「お互いをもっと知ることが大切だ。」という答えを

導き出した。特別支援学校の仲間一人一人の性格や好きなものについて、過去の交流を想起したり調べたりして把握し、楽しく気持ちよく活動できるように話し合い、準備をした。

活動後は、「A君が大好きなアンパンマンの絵を見つけて喜んでくれたから、ぼくもうれしくなったよ。」「走るのが速いB君が、自分から手をつないでくれたから、わたしのことを信頼してくれたのかなと思って感動したよ。」という声が聞かれた。

5・6年生は、これまでの交流でくすのき特別支援学校の先生が、その子が成長できるように、手を出さず、助けられる距離で見守っていることに気付き、「見守る」ことをテーマとして交流を行った。くすのき特別支援学校の友達が、自分らしく遊べるように、さいころつみでは、つみやすいようにサイズを大きくしたり、投げても壊れないように丈夫にしたりした。当日は、寝転んで休憩したがる子を、無理に遊びに誘わずに、一緒になって寝転がる姿が見られた。子供たちは、計画・準備から、交流会が終わるまで自主的に考え、行動することができた。



腰が引けた、アイマスク体験



体をつかったまねっこゲーム

成果

くすのき特別支援学校の開校から続いている交流会は、4年目を迎えた。子供たちは、交流の回数が増すごとに、主体的に考え、行動できるようになっている。「見守る」態度を受け継ぎ、誰もが幸せに生きられる校区を目指して、交流を継続させていきたい。

おわりに

本校では、校区の自然や産業を知る校区探検（2・3年生）や、校区の老人会との連携を図った、昔の遊び体験（1年生）や水稲栽培（5年生）、校区の一員として調べ、発信する防災学習（6年生）など、体験的な学習を実践してきた。また、くすのき特別支援学校の仲間との交流（全学年）を継続している。子供たちは、各学年の取組に

ついて意識しており、「来年はぼくたちも米作りをするんだ。」と、楽しみにしている声も聞かれる。そういった子供たちの思いを大切に、子供たちがより主体的に動き出せるよう、保護者、教職員、校区住民が一体となった教育課程の在り方について、ともに考え、協力し合っていきたい。

環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

豊橋市立老津小学校



創 立：1873年

住 所：〒441-3301 豊橋市老津町字宮脇15-4

連絡先：TEL 0532-23-0025 FAX 0532-44-2063

学級数：8 児童数：196人

H P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/oitsu-e/

未来に目を向け、問題解決力を高める児童の育成

はじめに

本校は、全校児童190人ほどの小規模校である。老津校区の北西は、昭和40年代まで海が広がり、かつてはのりの養殖が行われた農漁村地域であったが、昭和44年、海が埋め立てられ、明海地区産業基地となった。現在は、千両ナス・トマト・キャベツなど、野菜作りの盛んな地域である。3世代家庭の割合も高く、学校や地域の活動に

協力的である。子供たちは、素直で思いやりがあるが、学校生活においてやや控えめなところもある。地域の教材や人材を生かしながら問題解決的な学習を行い、「よいことを未来につないでいこう」とする意欲的な子供たちを育てたいと考え、総合的な学習・生活科を軸に授業実践に取り組んでいる。

実践内容①

「かっこいいな、消防団」

ねらい：団員減少という問題を抱える地域の消防団を未来につなぐために自分たちができることを考える。

子供たちにとって、火災は身近なことではなく、老津消防団の役割を具体的に知る子は少なかった。火災について関心を高めるため、過去に校区で発生した火災の写真や新聞記事を見せた。火災は怖いという認識をもち、火災発生時の対応に興味を抱いた。そこで、学校の消火設備を調べたり、中消防署の見学や地域の消火設備の確認をしたりした。火災発生時における、消防士の対応や消火設備の使い方を話し合うことで、消防団への関心が高まった。

老津消防団の活動を知るため、消防団の方面隊長をゲストティーチャーと位置付け、出会いの場を設けた。消防団の役割を具体的に話していただき、子供たちの疑問にも答えていただいた。女性の消防団員を招き交流するこ



とで、女性の方も活躍していることを知り、女子の追究意欲も高まった。器具庫の見学もし、消防団の取組に関心をもった。放水を観察し、道具を触るなどの体験を通して、消防団はかっこいい存在だと感じた。

消防団の活動を詳しく調べていく中で子供たちは、消防団員が減少し続けている事実を知った。この事実から、将来も老津が安心安全な町であり続けるのか疑問が高まり、これを課題として深く追究し始め、家族や地域の方のインタビューから、消防団は大切な存在だと再認識した。話合いを通して、消防団を守りたいという気持ちが高まり、消防団の取組を多くの人に知ってもらいたい、仲間を誘って自分も消防団に入りたい、消防団員にお礼が言いたいなど、子供たちは思いを行動につなげていった。



早出し放水訓練の見学・体験

成果

学習の中で、家族や地域の方にも、インタビューを通して消防団の問題を一緒に考える場を設けた。家族や地域の方の消防団に対する見方・考え方が、子供たちの思考の深まりにもつながった。実践を通して、消防団はなくてはならない存在だと感じるようになり、未来につなげたいという気持ちが高まった。

実践内容②

「老津の海調べ隊！」

ねらい：先人の苦労と努力を知り、地域に対する誇りや愛着を感じることができる。

老津の人々はかつて漁業中心の生活を営んでいたが、昭和40年代の大規模な埋立てにより、この生活を転換せざるを得なくなった。その生活の変化を受け入れた先人の決断により、現在は農業が盛んな地区になっている。子供たちは、校歌の歌詞「みなと」に着目し、校区探検で海の痕跡を探し始めた。森の中に堤防の痕跡を見つけ、昔の海の様子に思いを巡らせた。調査を進めると、あさりやのりが豊富にとれた豊かな海であったことが分かった。その海の埋立てを認めたことに疑問を感じた子供たちは

更に追究を進め、賛成や反対、将来への希望や不安など様々な葛藤があったことを知った。地域の古老のお話により、のりの減収、豊川用水開通、企業誘致などの状況を考え、海を手放す苦渋の決断をしたことが分かった。子供たちは、この事実を地域の人にも知ってほしいと考えた。



ここが海だったなんて信じられない！
(堤防のあとに立って)

成果

子供たちは、今まで気が付かなかった校区の変化に気付き、先人の苦労や努力を家庭や全校児童に伝えていきたいと思いを高めた。また、地域の方への尊敬の気持ちや地域への愛着を深めることができた。

実践内容③

「世界中の誰もが幸せに
～平和を未来につなぐ～」

ねらい：戦争体験者の気持ちに迫ることで、戦争のない社会を未来につないでいこうとする思いを高める。

日本全体の戦争から地域の戦争へと焦点化していく過程で子供たちが興味をもった渥美線電車機銃掃射を学級の課題として追究した。地域にある慰霊碑の見学や事件現場の視察、戦争体験者との交流といった体験活動を取り入れながら授業を展開した。戦争体験者の言葉や語るその姿から「二度と戦争をしてはいけない」という思いを肌で感じる事ができた。その後、戦争のない日本が今後とも続いていくのかを現状から考える中で、未来の日本

についても危機感をもつようになった。その危機感から、戦争をしないために自分たちにはできないことはないかと考え、行動化していった。

【児童Aの作文】 Bさんみたいに、戦争体験をした方には分からない気持ちを知って、戦争体験をしたときの気持ちを周りのたくさんの人に知ってもらい、戦争をしてはいけないという気持ちを広めたいです。



事件現場で体験者の方の話を聞く

成果

戦争を身近な問題であると捉えることができた。渥美線電車機銃掃射は身近な場所で起きた事件で、さほど年齢の変わらない人たちが被害にあっていることから、子供たちは物理的ばかりでなく、精神的にも身近に感じ、意欲的に学習を進めることができた。

おわりに

ESDの視点を「何を未来につなげていくのか」と捉え、身近な問題を自分のこととして受け止め、問い続ける子供を育てようと、問題解決力を高めることに力を入れてきた。団員減少に悩む「地域の消防団」、漁業から農業に転換した「先人の苦労や努力」、「戦争のない社会」を未来につなごうと、子供たちは仲間と解決策を話し合い、地域

や保護者に発信した。こうした学習に熱心に取り組む子供たちの姿から、自分たちで何かしようとする、10年後20年後にも生きてくる力の芽生えを感じた。今後も地域に寄り添ったESDの実践を継続することで、「地域社会の未来のためにできることは？」と問い続け、行動できる子供たちを育てていきたい。

環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

岡崎市立城南小学校



創 立：1977年

住 所：〒444-0835 岡崎市城南町1丁目11番地

連絡先：TEL 0564-52-2913 FAX 0564-52-2423

学級数：18 児童数：413人

H P：http://www.oklab.ed.jp/weblog/jonan/

ふるさと創生 愛プロジェクト

はじめに

本学区は、市の人口の急増に伴って新たに開発された地区である。交通の便が良く、商業施設も多いが、代表的な産業や名所はなく、地区としての特色は薄い。そのため、「ここが自分のふるさとである」という意識は、子供たちの中で余り強くもたれてはいない。

そこで、子供と地区の人が接する機会を多くつくることで、

人こそがこの地区の財産であり、特色であることに気付かせたい。そして、子供と地区とをつなげ、地区を愛する気持ちを育てていきたいと考えた。また、自分の夢をもち、この地で成長していく自分の姿を語り合えるようにすることで、自分たちがこれからの「ふるさと・城南」を創生していくのだという意識を強くもたせていきたい。

実践内容①

「学校の歴史を探る」(6年生)

ねらい：創立40周年記念行事として、開校当時の学校や地区の様子を探り、地区のことをより深く知る。

6年生は、開校当時の学校や地区の様子を探るため、卒業生や過去に勤務していた教職員から話を聞く機会を設けた。

まず、第1回卒業生である同窓会会長をお招きし、子供の目から見た開校当時の様子を話していただいた。机や椅子を運ぶ作業を手伝ったり、校舎の増築工事が続いている騒音の中で授業を受けたりしていたことをうかがった。「毎日の作業は大変だったけれど、自分たちの学校を自分たちの手で作っているという感じがして、いやじゃなかったんだ」という同窓会会長の言葉は、児童の心に残った。

次に、開校時に勤務していた教職員をお招きした。プールがまだ完成しておらず、近隣の小学校まで出向いて入らせてもらったことや、学習のための備品がそろっておらず、授業を行うことが大変だったこと、それでも、新しい学校

に勤務できることがうれしくて、工夫して乗り切ったことなどをお聞きした。

併せて、40年前、20年前、現在の3枚の学区の航空写真を見比べる学習も行った。開校当時は、運動場の中央に民家が残っていたこと、学校周辺の道路や商業施設も整備されていなかったことを知った。新しい道が通り、商業施設が完成して町が広がっていく様子を、児童は興味をもって学んだ。また、体育館やプールが完成し、校舎が増築され、校庭の樹木が育って、現在の学校の姿となっていく過程を知ることもできた。児童の口からは、「40年でこんなに変わったとは知らなかった」「あの家の人は、学校のためにどいてくれたのかな」と、変化に驚いたり、動向を気にかけてたりするつぶやきが聞かれた。



20年前の学校周辺を探る

成果

卒業生やかつての教職員の話を通して、子供たちは、児童や職員など多くの人の手によって学校が作られ、守られてきたことを知った。また、学校周辺の航空写真を見比べる活動から、現在の城南小学校や学区の姿は、地区の人の努力や協力によって形成されてきたことに気付くことができた。

実践内容②

「地域の自然災害を知る」(4年生)

ねらい：河川の氾濫による水害から町を守るため、
地域の人が長い時間をかけて行ってきた努力を知る。

本学区は、長い間、河川の氾濫に苦しんできた地域である。平成20年の大きな水害を機に、河川の大規模な改修工事が進められ、ようやく安心して住める状態になった。

まず、児童は河川工事の終わった川を観察した。その後、両親や祖父母から、水害状況の聞き取りをした。降水量が多いと頻りに地下道が通行止めになったこと、氾濫時には駐車場が冠水して車が故障し、家の中まで泥が入ってきたことを知った。更に、曾祖父母の時代には、氾濫に備え、天井裏に小舟を常備していたことも分かった。

次に、市河川課と防災危機管理課の方を講師として招へいし

た。学区の土地の高さから考えて、河川が氾濫した際には、学区全体が浸水してしまう恐れがあることを聞いた。更に、今後の河川整備の計画や、水害から町を守るため自分にできることをお聞きした。



工事が終わり、整備された川を観察

成果

児童は、水害を自分の生活を脅かす現実としてとらえ、水害の際には、早めの避難を心掛けて、自分の命は自分で守らなければならないという気持ちを強くもつようになった。また、安全な環境を得るまでには、多くの被害と大勢の人の努力があったことを知った。

実践内容③

「ようこそ 夢をかなえた先輩」(全校)

ねらい：自分の夢をもつことで自己有用感を高め、
この地で成長していく自分を見つめる。

児童が自分の夢について考える機会とするため、夢をかなえたり、夢に向かって努力を続けたりしている本校出身の先輩を招く「城南夢プロジェクト」を企画した。

第1回は、ダンススペース代表の市川透氏を招いた。夢を追って18歳でロシアのバレエ学校へ留学し、卒業後はそのバレエ団に入ったこと、帰国後はソリストとして活躍した後、自分のバレエ団を立ち上げたことをうかがった。講演後、市川さんが芸術監督を務めるバレエ・ネクストによる公演を鑑賞した。

また、第2回は、自転車ツーリストの溝口哲也氏を招いた。

世界各地を巡る際、実際に使用した自転車やテントを持ち込んで、現地地で出会った人々とのふれあいや、苦労したことなどを話していただいた。「夢をかなえるために大事なことは、一人になってもそれを続けること」という話が児童の心に残った。



ようこそ 夢をかなえた溝口先輩

成果

世界に出て活躍している人が、同じ学校の卒業生であるという点に、児童は親近感を覚えた。自分が今好きなこと、夢中になっていることを大事にしていけば、それが力となって未来の自分を創っていくことを知り、夢をもつことの良さを考えることができた。

おわりに

学校の歴史を探る活動を通して、児童は、卒業生や教職員、地域住民の頑張りに対して感謝の気持ちをもった。地域の自然災害を知る学習を通して、自分の命を自分で守ろうという気持ちになった。先輩から学ぶ活動を通して、今の自分を大切にしていきたいと考えた。以上の実践から、児童は、城南学区の歴史や自然、そこに暮らす人のことを

より深く知るようになり、人こそが地区を創っているということに気付くことができたと言える。

今後も、児童が、「ここが自分のふるさと」という意識を更に強め、これからの城南学区を自分の手で創っていくのだという気持ちをもてるように、ESDの視点に立った教育を進めていきたい。

環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー そ の 他

半田市立亀崎中学校



創 立：1947年

住 所：〒475-0024 半田市亀崎高根町5-40

連絡先：TEL 0569-28-0313 FAX 0569-29-5121

学級数：17 生徒数：537人

H P：http://www.kamezaki-j.ed.jp

未来の亀崎を支えよう

はじめに

本校は、「未来の亀崎を支えよう ～地域を愛し、地域を支える生徒を目指して～」を活動テーマとして、ESDを地域に伝わる文化や伝統、地域に携わる人々の思いから地域の魅力と課題を見いだす活動と捉えた。そして、ESDの実践を通して、地域を愛し、将来にわたって地域を支える生徒を育成すること、地域に学び地域を支える学校

をつくることを目標としてESDの活動に取り組んでいる。

一年生の活動では、「亀崎・有協の誇れるものを追究しよう」をテーマに、地域の祭礼や、地域に伝わる食文化について調べ学習を行った。本稿では、その中の三つの実践内容について紹介する。

実践内容①

「大発見！亀崎の食」

ねらい：地域に伝わる食文化について調べる活動を通して、食文化を守ろうという気持ちを育む。

活動を始めた頃の生徒たちは、自分たちが生活する亀崎という町の歴史について問いかけても、ほぼ何も答えられない様子であった。そこで、まず地域の魅力を伝えるために尽力されている方を講師として学校に招き、地域の歴史について教えていただいた。話を通して、亀崎は漁業が盛んであったことや、捕れたいわしで作られた「いわしはんぺん」が地域に伝わる伝統食であることを知り、生徒たちは、実際に伝統食に触れてみたいと考えようになった。

そこで、地域でははんぺんの製造・販売を行っている「政七屋」を訪問し、はんぺんを作る様子を見学したり、お店の方の思いを聞かせてもらったりすることにした。政七屋の方の話から、昔ながらの製法で作ることにこだわりを持っていること、素材の旨味を引き出すことに力を注いでいることを知ることができた。また、実際に「いわしはんぺん」を食べさせていただき、生徒たちは亀崎の伝統食に魅力を感じているようであった。中には初めて「いわしはんぺん」を食べたという生徒もあり、生徒たちの反応を

見ていると、実際に触れる・感じることの価値を改めて認識することができた。

伝統と真剣に向き合い、その魅力を発信していこうとするお店の方の思いにふれ、多くの生徒たちが「自分たちがもっと地域の伝統について学ぶ必要がある」「学んだことを周りに伝えていくことが自分たちにできることだと思う」という感想をもつことができた。



地域の歴史、伝統食の話聞く様子

成果

今まで知らなかった地域の歴史・食文化について知ることができた。また、伝統を守り、その魅力を伝えていこうとしている人の思いに触れる中で、自分たちも更に学びたいという気持ちや、地域に残る魅力を伝え、つないでいきたいという気持ちを育むことができた。

実践内容②

「潮干祭の歴史と文化を調べよう！」

ねらい：ユネスコ無形文化遺産に登録されている
「潮干祭」について調べ、新たな魅力を発見する。

300年以上にわたって受け継がれており、平成28年にはユネスコ無形文化遺産に登録された「潮干祭」。本校の生徒にとって身近なこの祭りについて、新たな魅力を発見するために調べ学習を行った。県社「神前（かみさき）神社」を訪問し、保存会の方々から県社と祭りの関係や神井戸の言い伝えについて教えていただいた。今まで祭りに参加してはいたものの、「県社との関係や神井戸については初めて知った」という生徒も多く、真剣に話を聞く姿が印象的であった。また、祭りで使う山車（やまぐるま）が収められている蔵を見学し、山車の細部まで見たり、

説明をしてもらったりする中で、山車の迫力や技術力の高さを感じ取っていた。

保存会の方々の姿や思いに感銘を受け、見学後には多くの生徒が、「地域の誇りである潮干祭を、より多くの人に知ってもらいたい」という感想を述べていた。



山車の蔵の見学

成果

潮干祭の魅力を再発見するだけでなく、祭りに携わる人たちの思いに触れる中で、「自分も地域の伝統を守っていききたい」「潮干祭の魅力を多くの人に伝えたい」という気持ちを高めることができた。

実践内容③

「見つけよう！有脇の魅力」

ねらい：有脇地区に伝わるかいどり、真古酌の薬師水について調べる活動を通して、地域の魅力に気付く。

本校の校区には、亀崎小学校と有脇小学校の二つがあるが、有脇小学校出身の生徒は少ない。そのため、有脇地区のことを知らない生徒が多いという実態があった。

そこで、ボランティアの方々と一緒に有脇地区を訪れ、かいどり、真古酌（まごしゃく）の薬師水について説明をしていただいた。ため池の保全を目的に、池の水を抜いて池を干す活動を「かいどり大作戦」と称し、地域の人々が力を合わせて保全のために力を注いでいること。数年前までは廃れてしまっていた、江戸時代に皮膚病の薬として江戸で評判となっていた有脇地区の薬師堂の井戸水を、

地域の人たちの熱意で再建したということを知ることができた。

学習後には、「かいどり大作戦に自分も参加してみたい」や「真古酌の薬師水を家族や知り合いに教えてあげたい」といった感想をもつ生徒が多く、有脇地区の魅力を感じている様子であった。



真古酌の薬師水の見学

成果

有脇地区にあるたくさんの魅力に気付くことができた。また、今後は地域の人たちと一緒に有脇地区を支えていきたいという気持ちを高めることができた。

おわりに

本稿で紹介した活動の他にも、本校では潮干祭の時期に合わせて行う地域の清掃活動や絵画コンクールへの出品、本校卒業生の話を聞く会などを行い、「地域学習」をテーマとしたESDを推進してきた。今後も、地域を愛し、将来にわたって地域を支える生徒を育成すること、地域に

学び、地域を支える学校をつくることを目標にESDを推進していきたい。そのために、今後は現活動が各教科とも関連した活動となるように現活動の見直しを図ること、活動の内容や成果を地域や他のユネスコスクールなどに、更に発信していく必要があると考える。

環境	国際理解
地域文化	気候変動
生物多様性	防 災
エネルギー	そ の 他

豊橋市立前芝中学校



創 立：1947年
住 所：〒441-0152 豊橋市前芝町字塩見1番地
連絡先：TEL 0532-31-0507 FAX 0532-34-1681
学級数：8 生徒数：104人
H P：http://www.maeshiba-j.toyohashi.ed.jp

みんなが平和に安全に過ごせる校区を目指して

はじめに

前芝中学校は、豊橋市西部に位置し、市内で最も生徒数の少ない中学校である。

校地には、豊川海軍工廠しょうがの慰霊碑がある。平和教育として、太平洋戦争を体験した方から当時の話を聴き、平和の大切さを感じ取る活動を行っている。

防災教育としては、5年前から、「校区・保小中合同防災

訓練」を実施している。校区全体は、三河湾や豊川放水路に囲まれ、海拔1～2mの平野が広がっている。巨大地震が発生したときには、津波の被害も心配される地区である。災害時には、中学生が中心となって幼児やお年寄りを助け、校区全員が安全に避難できるように、活動を続けている。

実践内容①

「慰霊碑から考える平和教育」

ねらい：豊川海軍工廠の爆撃で犠牲となった国民学校生徒の慰霊碑に注目させ、平和への理解を深める。

本校の正門の横に高さ2mほどの石碑がある。昭和20年8月7日の豊川海軍工廠への爆撃で犠牲となった前芝国民学校の生徒10名の慰霊碑である。しかし、何の碑であるか理解している生徒はほとんどいなかった。

そこで、平和教育のプログラムを作成し、この石碑に注目させながら、各学年に応じた「戦争と平和」についての学習を展開することとし、平成27年8月7日に、豊川海軍工廠空襲70周年記念公演「嗚呼、青春の花は咲く」を全学年が観劇した。

現在、総合的な学習の時間を使い、校区のグロブスターティーチャーから、戦時中の暮らしや、当時の人々の考え方などを教えてもらっている。また、3年生の社会科の授業では、アメリカとの開戦から日本に空襲が始まったこと、豊橋市街や豊川海軍工廠への爆撃など、開戦の経緯や戦争のてん末などを詳しく学習している。

更に、毎年、夏休みの全校出校日には、当時、豊川海軍



工廠で働いていた方を招き、空襲時の体験を聴く会を開いており、「自分の体のすぐ横を銃弾が走っていった」「避難していたところとは違う防空ごうの入り口が大爆発した」等、具体的な話を数多く聴くことができている。



慰霊碑「豊川工廠戦没学徒之碑」

成果

慰霊碑についての学習や観劇を通して、平和の大切さを実感することができた。総合的な学習の時間は、小学校で学んだことを、より広く深く学び直す機会となった。また、豊川海軍工廠での体験談で、石碑に刻まれた10名が命を落とした様子が詳しく分かり、戦争の悲惨さを心に刻むことができた。

実践内容②

「校区全体の安全を考える防災教育」

ねらい：地震や津波が起きたとき、中学生が先頭に立ち、校区全体の安全を守ることができる。

前芝校区は、保育園・小学校・中学校・校区市民館が隣接している。

三河湾や豊川放水路に囲まれており、海拔1、2m前後の平地が広がっていて、巨大地震の発生時に、津波被害の恐れのある地区である。

平成26年9月に、初めての「校区・保小中合同防災訓練」を開催し、1,000人余りもの人々が参加した。中学1年生は保育園児を連れて屋上に避難、中学2年生は地域の方や小学生を体験ブースへ誘導、中学3年生は校区の防災リーダーや消防団の協力を得て体験ブースの企画運営をした。ブースによって、事前に調べ学習をしたり、専門家の方から話を聞いて準備を進めたりした。こうした体験を通して、中学生はリーダーとして知識や経験を積むことに加え、地域の方や小学生など、「相手に合わせて説明する力」が必要だと学んだ。

平成27年には、更に防災クイズやロープワークを取り入れた。この年は、屋上避難の直後に雨が降って訓練計画の変更が必要となり、臨機応変な対応の大切さが分かった。

平成28年、津波対策として、「自宅からの高台避難訓練」を行った。訓練が近づくにつれて、避難への意識が次第に高まり、園児も小学生も中学生も、保護者と何度も相談を重ねた。「避難経路や高台避難場所は本当に安全か」ということを考えさせられる訓練となった。

平成29年3月には、「高台避難の図上訓練」を実施した。



消火器の使い方を園児に教える中学生

ここでは、「家が密集しており、火災が発生したら広がりやすい」「道幅が狭く避難しにくい」「木や

電柱が多く、倒れる危険がある」などの意見が出された。

この図上訓練を基に、7月、校区自治会長と中学生が話し合いをした。3月の図上訓練で各通学団から出された改善点を伝えたり、自治会長からガソリンスタンドのタンクのある場所や、液状化で通れなくなる道など、避難時の参考になる貴重な情報を教わったりした。9月の「校区・保小中合同防災訓練」は、市総合防災訓練のサテライト会場にもなっていたため、関係機関や業者のブースもたくさんあり、例年にない、いろいろな体験をすることができた。

本年度は、これまでの訓練に加え、国土交通省三河港湾事務所から担当者を招き、「津波の起き方」「液状化現象のメカニズム」を教わった。目の前で模型が崩れたり、土に埋もれたりするのを見て、津波や液状化現象の恐ろしさが、とてもよく分かった。

【生徒の感想】「津波の起き方や液状化現象の仕組みが、とてもよく分かりました。地震で揺れが起きたとき地中から水が出て建物が傾いてしまうので、避難時にも、十分注意したいと思います。」



液状化現象の恐ろしさを学ぶ

成果

中学生は、ブースを運営して、「良かった方法」や「改善すると良いこと」をまとめ、下の学年に引き継いでいく。校区、保育園、小学校、中学校が協力しながら、学んだ知識や技能を忘れず、防災意識を高くもって、ふるさと前芝の多くの人々が助かるように、また、地域づくりに役立つようにしていきたい。

おわりに

平成29年8月には、前芝を竜巻が襲ったが、本校生徒はボランティアで、瓦やごみを拾ったり、片付けを手伝ったりすることができた。

ハンドボール部を中心に、まだ片付けられていなかったガラスの破片などを拾い、災害の復興に大きく貢献した。

このように自主的な活動ができたのは、防災訓練を毎

年行っていることで、地域の方々や、保育園児、小学生と関わり、「中学生は地域を守る」という自覚が出てきたからではないかと思う。

これからも、中学生が災害時に校区の中心となって活動できるよう、「校区・保小中合同防災訓練」を始めとした様々な活動に取り組み、防災教育を進めていきたい。

環境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防災

エネルギー

その他

愛知県立千種高等学校



創立：1963年

住所：〒465-8507 名古屋市名東区社台2-206

連絡先：TEL 052-771-2121 FAX 052-775-5116

学級数：27 生徒数：1,082人

HP：http://www.chigusa-h.aichi-c.ed.jp

The World Is Not One (世界は一つではない)

はじめに

本校では「自主自律」を学校の基本理念とし、国際理解教育の推進を教育目標の一つの柱としている。毎日の教育がESDそのものであるという自負の元、「国際的な課題に目を向けて持続可能な社会を形成できる人材」を育成するために、豊かな人間力、異文化理解の力、協働できる力の涵養^{かんよう}を目指している。タイトルには補足があり、それは「Know the differences and accept them.

Communicate with each other and live together. (違いを知り受け入れよう 共に語り共に生きよう)」である。世界には様々な言語や宗教や習慣があり、人の考えも多種多様である。この事実を受け入れ、そこから意思疎通を図り共生できる社会を実現していこうとする謙虚で、かつ、確固とした意志をもって欲しいという趣旨である。

実践内容①

「国際理解講演会」



ねらい：国際社会に目を向けるきっかけを提供する

1、2年生全員と3年生希望者、更には保護者や一般市民で参加を希望される方を対象に、人権・医療・インフラ・持続可能な開発などに関して世界で重要な役割を果たしてこられた講師を招き、その仕事の内容や価値、どのようにして、あるいは、なぜその道に入られたのかなどについて語っていただき、国際協力への関心を高めると同時に深い理解へと導く企画になっている。

参加者には事前に資料を配るなどして意識付けをしたり、講師には映像や音声を多く使って視覚や聴覚にも訴える



アジアの子供たちの実情を語る池間氏

プレゼンテーションをするように、また、途中で参加者に質問を振るように依頼して効果を高めたり、工夫をしている。

講師の先生を3名固定し、3年サイクルの輪番でお願いすることにより生徒が3年とも違う話が聞けるようになり、また講師の先生も生徒の様子を分かった上で話すことができるようにという考えでスタートしたプロジェクトだったが、講師の都合が合わないなどの理由でこの点は必ずしも順調に運営されているわけではない。しかし、担当者が事前に講演を聴いたり、各方面から情報を頂いたりして講師を捜し、有意義な講演を聴く機会に恵まれている。最近3年間のテーマと講師は以下の通りである。

平成30年度

「世界の難民の現状と私たちにできること」

国連UNHCR協会職員 天沼耕平氏

平成29年度

「イスラム文化と現代の紛争」

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授
中西久枝氏

平成28年度

「懸命に生きる人々～日本人こそ学んでほしい～」

一般社団法人アジア支援機構代表理事 池間哲郎氏

成果

実施後のアンケート結果によれば、国際協力の実情や国際事情を理解することは不可欠だと思う生徒は95%前後になる。講演を聴く前から国際協力に関心があった生徒のうち90%前後が更に興味を増した、講演を聴く前には国際協力に関心がなかった生徒のうち70～90%が関心を抱いたと答えている。

実践内容②

「異文化講座」

ねらい：いわゆる「先進国」や「開発途上国」を合わせて色とりどりの国を知る

異文化講座の前身はSELHiという文部科学省のプロジェクトをきっかけに始まった「専門講座」という企画で、最初は国際教養科の生徒が英語を使って専門分野の予備知識を獲得し、将来の活躍の場をかいま見る場にする目的をもっていった。SELHi終了を機に、良いものはできる範囲内で継続するという考えに基づいて内容を再検討し、(1)「鉄は熱いうちに打て」の格言に従い1年生のうちに1回、(2)国際教養科だけでなく普通科も対象に、(3)使用言語は英語にこだわらず、(4)将来生徒たちが国際的視野をもって活躍する可能性のある分野の専門家(医学、物理学、建築、国際関係学、法学、マスメディア、心理学、ITなど)に講義をしていただくことにした。現在の異文化講座は(4)の内容を改め、「将来生徒たちが国際的視野をもって活躍できるように、様々な国の文化を知る機会を提供する」ことにしたものである。

具体的には、毎年1年生全員を対象に5、6、7限を利用して実施している。毎年アジア、アフリカ、南アメリカ、西洋諸国などの広範囲な国々から10か国の講師を招き、



南アフリカについて語るプリスカ氏

生徒とともに楽しめる様々な活動を通して、彼らの文化紹介をお願いしている。

事前準備とし

ては、各クラスの40名を4名×10班に分け、各班一つの国を選ぶ。事前に自分たちが選んだ国の事情を調べ講師に対する質問を用意する。当日は、9クラスからの4人(36人)が一堂に会して5、6限に異文化体験をする。事後の活動として7限に自分のクラスに戻り10班がそれぞれの異文化体験を共有して、クラスとして全体の感想をまとめる。

異文化体験では、その国の基本情報の他に様々な映像を通じた文化紹介であったり、民族衣装を着させてもらったり、伝統的な歌を歌ったり、踊りを教えてもらったりと趣向を凝らした内容になっている。平成30年度対象となる国は、ベナン、南アフリカ、スリランカ、イラン、中国、韓国、コロンビア、スペイン、イタリア、ドイツの10か国である。



インドネシアについて語るユン氏

成果

一人の生徒は自分が興味をもった一国の文化紹介しか体験できないが、クラスで10か国の体験を共有することで、興味の幅を広げることができる。異文化講座では専門性にこだわらず日常生活の中での文化に焦点が当てられているので、海外に目を開くための導入的な企画になっている。

おわりに

異文化講座が国際理解に対する「各論」だとすれば、国際理解講演会が「総論」に該当すると考えている。もう一つの企画であるインターナショナル・パーティーは県下の留学生を集めて行う異文化交流会で「実践」的位置付けになるのだが、部活動が主催する小さい規模の催しなので充実・発展のためには今後の工夫が必要となる。各企

画に対する生徒の評価はどれも好評であるが、国際理解講演会のアンケートにおいて「国際協力の実情や国際事情を理解することができる」と回答した者は全体の70%に留まる。この70%の生徒のみならず残りの30%の生徒にも将来国際的視野をもって社会に貢献してもらえるように教員一同努力を積み重ねていきたい。

環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

愛知県立刈谷北高等学校



創 立：1921年

住 所：〒448-0846 刈谷市寺横町1丁目67番地

連絡先：TEL 0566-21-5107 FAX 0566-25-9164

学級数：30 生徒数：1,195人

H P：http://www.kariyakita-h.aichi-c.ed.jp

知ろう 広めようSDGs

はじめに

SDGsが国連で採択されて3年目となったが、SDGsの認知度は15%にも満たないという。私たちは、まずは自分たちがSDGsのことを知り、他の人たちにも知ってもらえるようにしたいという思いで活動している。本校では、1・2年生国際理解コースで学校ESDの時間を6時間ずつ

設けている。今回は、この学校ESDの授業でどのような活動を行っているかを紹介する。また、本校にはユネスコクラブという部活動がある。この部活動でのSDGsに関する活動についても紹介する。

実践内容①

「姉妹校とのESDテーマ学習交流授業」

ねらい：姉妹校交流とSDGs学習を両校で進め、持続可能な社会づくりの担い手であることを意識する。

本校では1・2年生国際理解コースの生徒を対象に各6時間学校ESDの時間を設けている。このうち、1年生での実践を紹介する。

1年生は、これらの時間を利用して姉妹校の韓国観光高校とのESDテーマ学習交流授業を行っている。テーマとして2016年からはSDGsを取り上げるようにしている。

今年度はどのように進めていったのかを説明する。まず1学期には、双方で交流グループと個人個人のパートナーを決定した。そしてパートナー同士で自己紹介シートやカルチャーボックスを交換して交流を深めていった。カルチャーボックスでは、お互いの国のお菓子を送り合って楽しんだ。また、SDGsの基礎知識を本や動画を使って学習した。

2学期に入ると、グループ研究を中心に行った。SDGs

のどのゴールをメインに研究するかを決め、現状と課題を調べ、好事例を探し、ゴール達成への提言づくりを行っていった。五つある各グループで今回選ばれたゴールは、1. 貧困、2. 飢餓、4. 教育、5. ジェンダー、15. 陸の生態系であった。グループ研究に3時間使い、その最後に日本側のグループ同士でポスターセッションを行い、情報共有と発表準備をした。そして11月にはいよいよスカイプを使った成果発表会を行った。司会を双方から2名ずつ出して会を進めていった。前半には、本校のグループが各テーマについて調べてスライドにまとめたものを英語で発表した。後半には、姉妹校からのクイズによって韓国でのSDGs事情を学んだり、テーマを織り込んで作られた物語を楽しんだりすることができた。



姉妹校からのクイズに答える生徒たち

成 果

お互いの成果を発表し合うことによって、異なる視点からの発見を得て、SDGsに関する理解を深めることができた。日本と韓国の高校生同士がパートナーとして、SDGsについて調べ、考え、成果物にまとめていく経験は、今後様々な人たちとグローバルに協働していくことの良いきっかけとなった。

実践内容②

「ユネスコクラブの校内活動」

ねらい：SDGsの17ゴールパネルを作成・展示
することによって、SDGsの認知度を高める。

SDGsと言えば、知っている人がまず思い浮かべるのは17のゴールを表すカラフルなロゴである。そこで、SDGsの認知度を高めるため、ユネスコクラブは文化祭において、JICA中部に展示してあったSDGsパネルを参考にして、独自にSDGs17ゴールのパネルを作成して展示することにした。また、学びを深めるため各ゴールに1問ずつクイズを付けて展示することにした。

クイズ作成のためには、部員たちは自分が選んだゴールについて、まず自分がその内容をよく調べなければならな

い。調べるための資料としては、朝日新聞やプラン・

インターナショナルが無償で提供している小冊子や一般社団法人Think the Earthが学校向けに提供してくれた『未来を変える目標SDGsアイデアブック』を主に使用した。このクイズ作成には手こずっていたが、SDGsの理解を深めるよい活動となった。



手作りSDGsパネル(クイズ付き)

成果

ほとんど何も知らなかった部員たちのSDGsについての知識はかなり増加した。今後は部員たちのSDGsアンテナに引っかかる出来事が多くなるだろう。展示見学者は余り多くなかったので、次年度もSDGsを取り上げ認知度アップに取り組みたい。

実践内容③

「小学校外国語活動出前授業」

ねらい：地域の小学生に英語の楽しさを体験してもらい、積極的に異文化に触れていく態度を育てる。

本校のユネスコクラブは、市内にある住吉小学校の5年生を対象に外国語活動出前授業を行っている。時期は、本校の2学期期末考査最終日の午後に設定している。部員たちにとっては、考査期間中は準備や練習ができないので、2週間前には準備を完了させなければならないので大変である。しかし、実際に自分たちが用意した活動を小学生たちが笑顔でやっているところを見るのは格別である。

45分の授業で三つくらいの活動を行うのが適当である。今回は、ジェスチャーゲーム、ファニーフェイス(福笑い)、

そしてスゴロクの三つの活動を用意した。ジェスチャーではスポーツ名を、ファニーフェイスでは顔の部位や上下左右の表現を、スゴロクでは簡単な英文の指示を読むことを、体験を通して学んでもらった。楽しい英語体験を通して新しいことを自ら学んでいく態度を育成する活動である。



ファニーフェイスを楽しむ児童たち

成果

アンケートによれば、「楽しかったですか」の問いに対して、全員が「とても楽しかった」と答えている。英語でゲームを楽しみ、積極的に英語を聞こう話そうという態度を育成することができた。今後はもう少し異文化に触れる内容を考えてみたい。

おわりに

本校には来年度から国際教養科が設置され、それに伴い更にSDGs学習を進められるようになる。国際教養科では、1年次には「総合的な探究の時間」、2年次には「国際理解」、3年次には「地域研究」や「時事英語」などの科目でSDGs学習を深められる。ユネスコスクールとして、教育を通してのSDGs達成にますます貢献していくことになる。

国際教養科だけではなく普通科でも、日本及び姉妹校のある韓国、カナダ、オーストラリアを始めとする他国とも協力してSDGsを広めていく。大学や企業で先進的に取り組んでいる人たちから学び、得られた知識や知恵を小中学生に伝えていく。そんなSDGs教育を展開していきたい。

環境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防災

エネルギー その他

名古屋市立名東高等学校



創立：1984年

住所：〒465-0064 名古屋市名東区大針一丁目351番地

連絡先：TEL 052-703-3313 FAX 052-703-3401

学級数：27 生徒数：1,077人

H P : <http://www.meito-h.nagoya-c.ed.jp>

名東版ESDでホールスクールアプローチ

はじめに

名東高校は1984年に、豊かな国際感覚を育むことを目標に普通科・英語科併設の新設校として開校された。創立時より、「平和を愛し、広い国際的視野に立つ人間の育成」を教育目標の一つに掲げ、英語教育及び国際理解教育を推進してきた。2010年度の学科改編により誕生し

た「国際英語科」を中心に進めている学習活動がユネスコの理念に沿っていることから、ユネスコスクールに申請し、2014年に認定された。現在は、普通科の生徒も含め、ユネスコスクールとしてESDを軸にした学校づくり—ホールスクールアプローチに取り組んでいる。

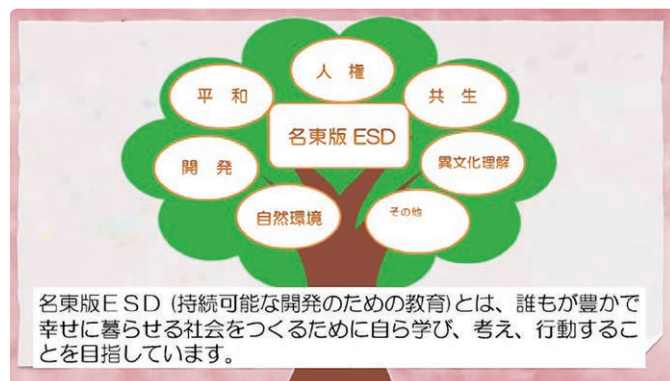
実践内容①

「名東版ESDの設定」

ねらい：名東高校が目指す生徒像とESDの関連性への理解を深める。

名東高校では、ビジョン委員会を設置し、その時々が必要に応じた課題を検討し、学校づくりの指針を提示してきている。2014年にユネスコスクールに認定されたことで、本校の教育に新たな特色が加わった。ビジョン委員会では、名東高校で過ごす3年間を通して「育てたい力」とESDの概念は親和性が高いと考え、可能なところからESDを軸にした教育を実践していくことを方針とした。3年間を見通し、全ての生徒に対する教育の場として設定しやすい学校行事や総合的な学習の時間の機会を活用したESDの実践を企画し、そのための準備を段階的に進めた。2016年度までは、主に教員がESDについて共通理解を深める学習を重ね、名東高校で実践したい教育を「名東版ESD」のイメージ図を中心にまとめた。そして、

2017年度より①新入生オリエンテーションでの「名東版ESD」の説明、②1年時の合宿研修での「人権・共生」に関するワークショップ、③2回の「ESDセミナー」を実施し、2年生の活動への橋渡しとして④ESDに関連する春休みの課題を設定した。2018年度より、2年生の修学旅行では、広島を拠点に据え、従来の平和学習に加えてESDに関連するテーマ性をもつ班別研修を実施するに至っている。具体的には、総合的な学習の時間に、研修班ごとに設定したテーマを念頭に置いた事前学習を行い、テーマに沿った訪問施設での研修計画を立て、実際に現地にて研修をする。そして、事後学習として研修レポートにまとめ、1年生に対してプレゼンテーションを行う時間を設けた。



名東版ESD

成果

生徒は、4月のオリエンテーションから始まり、折に触れて「ESD」という言葉を耳にするので、次第に身近に感じるようになった。ESDセミナー後の感想文の内容にも、質・量ともに関心の強さが表れているものが増えた。「ESDについてもっと知りたい。」という感想も見られた。

実践内容②

「ESDセミナー」(1年生)

ねらい: ESDを身近に感じるように年間で2回の講演を聴く。
テーマは「環境」「開発」「平和」

2017年度入学生より、学期に1回程度、ESDのテーマについて考えさせることを目的として「ESDセミナー」を実施している。1学期のオリエンテーションと合宿研修でのESDの導入を踏まえて、2学期と3学期に1回ずつ講演を聴く。1回目は10月に行い、主に地元の企業が取り組むCSR(企業の社会的責任)活動について学ぶ。進路を考え始める時期でもあるので、身近な企業で仕事をする人々からESDに

つながる活動を知ることがよい刺激となる。2回目は2月に行い、日本赤十字病院が行っている国際的な活動について学ぶ。そして、春休みにESDに関する課題を設定し、2年生修学旅行のテーマ設定への布石とする。



2018年度第1回ESDセミナー
(平成30年11月5日、中日新聞朝刊)

2018年度第1回ESDセミナー
(平成30年11月5日、中日新聞朝刊)

成果

1回目は身近で具体的な実践例に触れるのでESDとしてよく理解できた。2回目の日本赤十字病院の講演は、海外で医療支援活動を行う卒業生によるものであり、生徒は親近感をもって体験談を聴き、国際的な活動についての認識が深まった。

実践内容③

「修学旅行」(2年生)

ねらい: 学年全体の活動、クラス別の活動、班別分散研修のいずれにもESDにつながるテーマ性を設ける。

本校は、これまでもテーマ性をもって修学旅行を実施してきた。全体で訪問する広島での平和教育、防災について学ぶ神戸などを拠点とする行程が組まれていたが、参加する生徒の姿勢には、主体的に取り組むというよりも与えられたコースを巡る受動的な印象があった。そこで、1年生での学びを継続するためにESDと生徒の「主体的な学び」に焦点を当て、修学旅行の在り方を検討した。まず、拠点を広島に絞り、従来の移動時間を省くことでクラス別

活動と班別研修時間を増やした。

いずれもESDに関連する訪問地の候補を幾つか用意し、ESD的なテーマに沿った活動ができるようにした。生徒は、選んだテーマを中心に、研修班を構成し研修計画を立て実行に移す。事後レポートを兼ねて、1年生向けの研修報告プレゼンテーションにまとめ、1年生の教室で全ての班がプレゼンを行う。



1年生に報告プレゼンテーション

成果

2年生は、事前の修学旅行説明会で「ESD」的な観点と旅行全体との関連性を確認した上で、準備、実践とも主体となって活動できた。報告プレゼンテーションを視聴した1年生には、「分かりやすい。」「参考になった。」と好評であった。

おわりに

ホールスクールアプローチ—学校全体での取組—はユネスコスクールとしての目標の一つである。名東高校がユネスコスクールとして認められたのは、専門学科である「国際英語科」の取組によるところが大きいと考えられる。であるからと言って、全く同じ内容の学習活動を「普通科」の生徒へ拡大するというのも現実的ではない。本校の教育活動の中でホールスクールアプローチを実践するにはどのような方法があるかということを常に課題としている。

ユネスコスクール認定以前から継続課題としている「育てたい生徒像」や将来必要とされるであろう「力」を検討する中で、ユネスコが提唱してきたESDに着目した。名東高校が目指すべき教育とESDとの関連性を教員で共有し、「名東版ESD」として、名東高校の教育の軸に設定できたことは何よりも大きな成果である。教員間の共通理解を基盤に、学校全体としてESDの実践を始めることができ、ホールスクールアプローチのスタートラインに立ったと言える。今後もこの取組を充実させていきたい。

環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

日本福祉大学附属高等学校



創 立：1958年

住 所：〒470-3233 知多郡美浜町中之谷2-1

連絡先：TEL 0569-87-2311 FAX 0569-87-2312

学級数：17 生徒数：539人

H P：http://www.n-fukushi.ac.jp/koukou/

“FUKUSHI”マインドあふれるリーダーの育成

はじめに

日本福祉大学に付属する高等学校として「万人の福祉のために真実と慈愛と献身を」という教育標語のもと、生徒たちは日々勉強に部活に旺盛に取り組んでいる。私たちは「弱者を守り保護する」という「これまでの福祉」の概念を拡大し、先進国・開発途上国を問わず、「すべての人間が日常の暮らしの中でふつうのしあわせを創造する」ことこそ、

本当の意味での福祉の実現であり、なおかつ、持続的な社会の実現につながるものであると考える。そのためにも、教育課程の中に、多様な視点から“FUKUSHI”を学ぶ学校設定科目を配置するとともに、ボランティア活動・社会貢献活動を通してその学びを社会に生かす取組・実践を行っていかうと考えている。

実践内容①

「探究の力を伸ばし、育てる“GFS”における学び」

ねらい：「ふつうのくらしのしあわせ」について課題を発見・思考・討議し、解決に向けての実践力を育成する。

未来に生きる高校生は、自分自身はもとより、他国の人も含めて、「すべての人間のふつうのくらしのしあわせ」をどう考えるかという課題を自分の未来設計の中に組み込まざるを得ない。この「FUKUSHI」に関わる課題は、グローバルな視点や思考力・問題解決能力を育成するのに最もふさわしい課題である。2017年度より学校設定科目として「Global FUKUSHI Studies (以下「GFS」)」を設定し、その取組において、自分たちの住む地域はもちろん、日本・世界に視野を広げ、すべての人々の共生を可能にし、ともに、持続する社会づくりの主体者となるためのシチズンシップの育成に努めている。GFSⅠでは「すべての人々のしあわせ」を実現するための基盤となる三つの事項—①平和②持続する社会づくり③多文化共生について、



探究・討議・ICTの活用する方法も含め、広く学ぶことを目標とする。昨年度はこのGFSⅠの授業において、愛知県教育委員会が推進する「ESD活動・研修促進事業」に取り組み、「他国を理解し、国際協力をどのように推し進めるのか」ということを深く学ぶ機会を得ることができた。GFSⅡでは1学年での学びを基礎に、更にSDGsとも関連した実社会の課題と深く結びついたテーマを設定し、協働して探究活動に取り組んでいる。2018年度は「医療・教育・ジェンダー・水を中心とした環境問題・国際理解・日本のもつ力」に着目した取組を展開している。12月にはチームごとにポスターセッションを行い、発表を聞き、意見を交換することで、互いのテーマがそれぞれに深い関わりをもっていることを実感することができた。



教育委員会が推進するESD活動・研究促進事業

成果

「FUKUSHI」を多様な角度から分析・探究する視点の獲得に加え、討議のための方法や手段の獲得、ポスターセッションやレポートの作成などアウトプットの力が向上したことが成果である。次年度のGFSⅢでは「問いをつくり出す力」の育成に努め、その学びを積極的に校内外、国内外へ発信をしたいと考える。

実践内容②

「フィリピンの姉妹校とともに進める
ESDの活動」

ねらい：環境問題、気候変動、貧困など、両国に関連する課題について英語を活用してともに学び、実践する。

フィリピン・ネグロス島にある姉妹校シラインスティテュート高校（以後「SI校」）との協同学習に取り組んだ。フィリピンの自然環境を改善・保護することが、自らの日本の生活と深い関わりがあることを学び、環境を守る方法や支援の在り方について考えるとともに、SI校での授業やホームステイを通して英語活用能力を高め、互いの文化交流にも取り組んだ。2年目となる今年の交流は、7月末より本校生徒がまず2週間渡比し、その後続けて10日間ほど

SI校の皆さんが来日する形をとった。3週間の日程の間、日本福祉大学が主催する「World Youth Meeting」にも共に出場し、英語でのプレゼンテーションにより学んだことを発信する機会をもつことができた。また、今年度からは生徒のみならず、両校の教員のExchange Internにも取り組み、互いの力をそれぞれの学校教育の取り組みの中に生かすことにも挑戦した。



ワールドユースミーティングでの発表

成果

姉妹校提携を結んで2年目を迎え、SI校との協同学習の活動に興味関心を抱く生徒・教師が昨年に比べ増加し、その認知度が学校全体としてもアップした。また、SI校の先生には渡比前の事前学習にも積極的に参画してもらい、生徒との信頼関係を構築することができた。

実践内容③

「生徒会・部活動・委員会における
ESD活動推進」

ねらい：それぞれの組織の特性を生かした学校ぐるみのESD活動を展開し、地域社会への貢献を図る。

日本に続いた震災を巡り、学校の諸組織が様々な取組を行っている。生徒会は毎月14日に熊本震災復興のための募金活動を行い、和太鼓部は東日本大震災被災地支援の演奏活動を震災直後より継続して行っている。今年度は、和太鼓部の活動を通して福島県立福島商業高校との交流が進み、文化祭には彼らを招き、ともに被災地支援の在り方を考える取組を行うことができた。国際協力部では2014年度より5年間継続して、岩手県陸前高田市の保育

園に手作りのクリスマスカードと美浜町のみかんを贈る取組を行っている。こうした諸組織による被災地支援活動が進むことにより、保健委員会を中心に全校で行っている避難訓練や防災教室にも真剣に取り組んでいる。部活動では「One Action Plan」と題して、部活の本来の活動に地域活動・地域貢献をプラスする取組を推進している。



和太鼓部の東日本震災被災地支援演奏

成果

今年度は特に「被災地支援」をメインに据えた活動が大きく前進した一年であった。学校内の諸組織の活動が連鎖を生み出し、互いに絡み合いながら活動に深まりをつくり出してきた。また、取組を継続して行うことの重要性も生徒たちに大きな教訓を与えたと言える。

おわりに

2018年度、本校は創立60周年を迎えた。その記念すべき年度にユネスコスクールの認定を受けたことは、学校の歴史に花を添える出来事であった。創立60周年記念式典での「誓いの言葉」で、ユネスコスクールの認定とも関わらせて代表の生徒は次のように述べた。「グローバルな視点で人間と社会の課題を考えることは、豊かで平和な未来を

つくり上げるためには極めて大切な学習であり、その勉強は創立者の鈴木修学先生のお考えの中心にあった『人間の尊厳を大切にすること』にまっすぐにつながるものだ。」地球規模の課題を自分事としてとらえ、探究を深め、解決に向けて行動を起こすことができる生徒の育成を目指して、学校ぐるみの取組を更に推進していきたいと考える。

環 境	国際理解
地域文化	気候変動
生物多様性	防 災
エネルギー	そ の 他

豊橋市立くすのき特別支援学校



創 立：2015年
住 所：〒441-8124 豊橋市野依町字上ノ山3番地の2
連絡先：TEL 0532-29-7660 FAX 0532-25-1007
学級数：49 児童生徒数：253人
H P：http://www.kusunoki-s.toyohashi.ed.jp

地域とともに歩む開かれた学校づくり

はじめに

本校は、2015年4月に開校し、4年目を迎える豊橋市立の特別支援学校である。小学部、中学部、高等部からなり、児童生徒の通学区域は、豊橋市・田原市となっている。2016年ユネスコスクールに加盟申請をし、2019年7月、ユネスコ本部で加盟承認を受けた。開校当初より実施してきた地域との交流や、近隣の小学校、中学校及

び高等学校との交流及び共同学習を、ESDの視点で捉え直し、全校で取り組んでいる。本校のESD教育の目的は、①地域へ出向く活動を推進することで、自立と社会参加を推進する。②地域とつながる活動を推進することで、豊かな人間性を育む。の2点である。

実践内容①

「わくわくタイム」(小学部)

ねらい：同年齢の友達と関わる中で経験の拡大を図り、豊かな人間性を学ぶ。

小学部は、開校当初から近くの豊橋市立野依小学校(以下野依小)と学年ごとに交流及び共同学習を行っており、「わくわくタイム」という名称で親しんでいる。児童が徒歩で往復できる場所に互いの学校があるという利点を生かし、年間2、3回、どちらかの学校を活動場所として行っている。

新学期が始まると、直接交流の前に自己紹介カードを交換し、ペアの友達の名前や写真を見て、わくわくしながら交流当日を迎える。1学期、本校で行った4年生の交流では、初めに野依小4年生全員による「ソーラン節」の発表があった。その楽しそうな雰囲気、見ていた本校の児童もいつの間にか一緒になってソーラン節を踊って

いた。そのあと、野依小の児童とペアになって、本校の運動会で行った競争遊戯を行った。本校の児童にとっては、繰り返し練習してきた競技であり、自信をもって活動することができた。2学期、野依小での交流は、野依小の児童が本校児童の大好きな遊具遊びを考えてくれ、盛り上がることもできた。どちらの学校の児童も、ペアの友達と楽しんで活動する姿が見られた。交流後に野依小の児童から、「はじめはどんな子かわからなかったけど、交流していくうちになかよくなれました」「またいっしょに遊びたいです」などの感想が届いた。また、交流日より「わくわくタイム」を互いの家庭に配布し、交流教育への理解を深めている。



ペアの友達と協力して競技する様子

成果

小学部1年生から、交流及び共同学習を積み重ねることで、交流後に楽しかった気持ちを簡単な言葉や身振りで伝えたりすることができるようになっていく。本校児童にとって、同年齢の児童と同じ場所で、同じ活動と一緒にいることで、人との関わり方を学ぶ良い経験となっている。

実践内容②

「動物との触れ合いから食を学ぼう」(中学部)

ねらい：動物と触れ合う活動や工場見学を通して身近な食べ物に興味をもつ。

中学部2年生は、9月に近くの牧場に行き、生まれたばかりの子牛にミルクをやるという体験をした。4月からの継続した学年テーマ「動物との触れ合いから食を学ぼう」に沿った活動の中で、1学期には動物園でやぎなどの動物に触れたり、同じ牧場で牛を見たりする経験を重ねてきた。今回、恐る恐るではあるが、生徒全員が活動に参加し、子牛の息づかみや温かさを感じることができた。

10月には近所の製乳工場に行き、子牛にあげたミルク

が乳製品になるまでを見学した。更に、スーパーマーケットで牛乳を買う学習を経て、最終的には自分たちで乳製品(プリン)を作る調理実習を行った。生徒たちは、教室や廊下に掲示した写真を見て、ミルクがプリンになるまでを振り返り、食への関心を深めた。



生まれたばかりの子牛にミルクをあげる様子

成果

学校周辺の地域資源を活用し、生徒たちは体験を通して身近な「食」への関心を深めることができた。年間を通したテーマ設定を設定し、生活単元学習だけでなく、各教科等につながりをもたせることで、生徒にとって分かりやすい学びの機会とすることができた。

実践内容③

「地域に根ざした産業科によるカフェ運営」(高等部)

ねらい：カフェ運営を通して専門学科(農業、流通・サービス)の充実を図り、働く力を身に付ける。

高等部産業科の教育課程の特色として農業を中心とした専門学科を設定している。「栽培から販売まで」を合言葉に、農作物の栽培からカフェ運営(調理・接客)に至るまで生徒自身が流通の流れを意識した授業展開を実践している。カフェは、「Smile cafe」という名前で月に1回から2回オープンし、地域の方、保護者、職員を中心に50名から70名の来客がある。メニューは、スイーツとドリンクのセットである。材料には、本校で収穫したさつまいもや

豊橋茶から作った抹茶など、で



カフェでの接客の様子

きる限り地元産のものを使用している。事前に、提供するスイーツを試作・試食して、生徒たちがこの味にしようとするかを決める。また、生徒の意見で、学校周辺の家庭へのポスティングや通りに面した場所に開催日の提示を行っている。当日は、地域の方と関わりながら、慎重に注文を受けたり、丁寧に質問に答えたりと笑顔の対応を心掛けている。

成果

産業科の生徒たちは、カフェ当日に至るまでに、授業の中で提供食材の試作をしたり、カフェ設営をしたり、自分で考え動くことができるようになってきた。地域の方に喜んでもらうことが生徒の励みにもなり、コミュニケーション能力など働くために必要な力が身に付いてきている。

おわりに

地域とのつながりを大切にしたい学校づくりをしてきて4年目になる。小学部、中学部、高等部それぞれの児童生徒の実態に応じて、地域との関わりを模索し教育活動を行ってきた。地域の方には、学校行事や高等部のカフェを楽しみにして来校してくださる方が増え、本校への期待が感じられる。様々な活動を通して、本校のESDの目的で

ある障害のある児童生徒の自立と社会参加の推進や、豊かな人間性を育むことができつつある。今後、次期学習指導要領にある社会に開かれた教育課程の実現のためにも、ESDの視点で教育課程を見直して地域とのつながりを大切にしていきたい。

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりやねらいとして、日頃ESD活動に取り組む小学校・中学校・高等学校、特別支援学校、大学の、児童生徒、学生、教職員等が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子供たちが学び合いました。ここに集う子供たちの輝く笑顔は、私たちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

当日は、ユネスコスクールを中心とした小学校から大学までの児童生徒、学生、教職員等約170名が集い、活動発表や意見交換を行いました。

日時 平成30年10月20日(土) 正午から15時

会場 刈谷市産業振興センター 7階小ホール、6階会議室

主催 愛知県教育委員会

後援 日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

ポスターセッション

① 12:00～12:15	豊橋市立幸^{みゆき}小学校 「わたしたちと防災」 地震に備え、自分の命をどう守ればよいのか、何をすべきか考えました。学んだことを保護者や地域に発信しています。
	半田市立亀崎^{かめざき}中学校 「すべての人に持続可能で公正な生活を～検察庁での職場体験を通して～」 検察庁での職場体験を生かした、すべての人が持続可能で公正な生活を送ることができる社会のしくみについての報告。
	日本福祉大学附属高等学校 「世界に笑顔をお届けよう！～身近にできる国際協力～」 「星に願いを！七夕短冊コンテスト」「マングローブ植樹活動」「フェアトレードバック販売」についての報告。
② 12:15～12:30	豊橋市立野依^{のより}小学校 「みんなの幸せ追求し隊～『してあげる』から『一緒にやろう』へ～」 校区内にある特別支援学校との交流を通して、「みんなの幸せ」について追求した活動を報告。
	名古屋国際中学校 「Sus-Teen！10代のアクションが未来を創る名古屋国際中学校」 有志の生徒の集まりSus-Teen！が、国際交流活動や環境調査などを通して気候変動解決のためのアクションを実行する。
	名古屋市立山田高等学校 「『地域ボランティア清掃活動（若竹クリーンプロジェクト）』を中心とした生徒会執行部活動」 清掃活動を中心に、「あいさつ」や「いじめ防止啓発」運動など、地域とのつながりを意識した生徒会の活動報告。
12:30～12:40	質疑応答

参加申込校（順不同）

名古屋市立神の倉幼稚園	東浦町立藤江小学校	名古屋市立宝神中学校	名古屋市立山田高等学校	愛知県立国府高等学校
名古屋市立桶狭間幼稚園	豊橋市立幸小学校	一宮市立南部中学校	愛知県立豊田東高等学校	名古屋国際中学校
名古屋市立内山小学校	豊橋市立大崎小学校	半田市立亀崎中学校	愛知県立刈谷北高等学校	中部大学第一高等学校
日進市立梨の木小学校	豊橋市立大清水小学校	岡崎市立新香山中学校	愛知県立知立東高等学校	日本福祉大学附属高等学校
一宮市立中島小学校	豊橋市立高師小学校	豊橋市立本郷中学校	愛知県立豊橋南高等学校	愛知教育大学
あま市立甚目寺小学校	豊橋市立野依小学校	豊橋市立前芝中学校	愛知県立豊橋特別支援学校	岡崎女子大学

交流会プログラム

12:45	開会行事 (主催者挨拶)	
会場移動・休憩		
12:55～13:50	各部会	
	小学校 分科会 (小ホール)	<p>一宮市立中島小学校 「自然がいっぱい みんなが笑顔の中島小～トンボ園・にこにこ畑を利用して～」 「トンボ園を利用した活動」「にこにこ畑を利用した栽培活動」「行事と関連付けた栽培活動」についての報告。</p> <p>豊橋市立高師小学校 「高師のお米は『どうまい』よ!」 高師小学校伝統のもち米づくり「勇・絆(ゆうき)」についての活動報告。</p> <p>ディスカッション ファシリテーター：岡崎女子大学 子ども教育学部 教授 蜂須賀 渉 氏</p>
	中学校 分科会 (604会議室)	<p>名古屋市立宝神中学校 「笑心(えごころ)～君が笑えば心も笑う～」 「藤前干潟学習」「清掃ボランティア」「宝中交流会」についての報告。</p> <p>豊橋市立前芝中学校 「災害から身を守ろう」 防災学習の核として5年間行った、前芝の合同防災訓練における、中学生のリーダーとしての活動と学びを報告。</p> <p>ディスカッション ファシリテーター：岡崎市立新香山中学校 教諭 内田 裕斗 氏</p>
	高等学校 分科会 (603会議室)	<p>愛知県立刈谷北高等学校 「知ろう 広めようSDGs—持続可能な社会の担い手づくりの第一歩—」 国際理解コース1年生が姉妹校韓国観光高校と行っているESDテーマ学習交流授業とユネスコ部の活動を報告。</p> <p>中部大学第一高等学校 「にしんCOOL CHOICEプロジェクト—地域の小学生と考える環境問題—」 地域の小学生を対象に日進市環境課と連携して行っているCOOL CHOICEプロジェクトの実践報告。</p> <p>ディスカッション ファシリテーター：愛知教育大学 理科教育講座 教授 大鹿 聖公 氏</p>
	環境学習 プログラム (602会議室)	<p>あいちの未来クリエイイト部／愛知県立知立東高等学校 「環境学習プログラム『すごろくカメマス』の作成と実践」 イシガメ・スッポン・ミシシippアカミミガメを選び、コマを進め、止まったマスの植物・動物をエサにしてカメの数を増やしていくボードゲーム体験。</p>
	会場移動・休憩	
	14:00～14:30	<p>基調講演 「落語から垣間見える江戸時代のエコ社会」 落語とおはなし(落語に学ぶ江戸時代の暮らし。過去から現代、そして未来へ受け継いでいく大切な文化。) 講師 春風亭 昇吉 氏(落語家)</p>
	14:30～15:00	全体ディスカッション～まとめ

当日の参加者の声

今日の交流会についての感想

小学生	他の学校の取組などを聞いて、自分の学校でやってみたいと思いました。
中学生	私たちと全然ちがう環境で生活している人たちと意見を交換することができて、とても楽しく、良い刺激になりました。
高校生	自分が全く知らなかったことを知り、良い経験になった。また、熱意や高い志をもって活動する同世代の人々を見て、刺激された。一人一人が社会の問題について考えて動いていくことが大切だと感じた。
大学生	近年、ユネスコスクールの数が増えているが、実践学生から活動内容を聞くことができてよかった。ただ、想像以上に地球市民という意識よりも、地域との関わりが強いと感じた。ESDはthink globally、act locallyを言うがthink globallyまで生徒の考えや学びが追いついていないと思った。
教職員	意識の高い高校生もいて、こうした取組でESDの考えが広がっていけば良いと思いました。
教職員	学年、学校の枠を越えて系統立てて計画的に取り組む必要があると思った。
教職員	他校の取組の中で、“やってみてよかったこと”、“自校でもやってみたいこと”などグループで話し合ってみえた。教育活動の中で、このような視点を持ち、取組を整理していきたい。
一般参加者	学校それぞれのアプローチの形が異なるのがとっても面白かったです。個性が表れていて良かったです。
一般参加者	自校だけでなく、他校の行っている行動・企画・取組などが知れてすごく参考になった。自分の学校でも生かしていきたいと思ったし、すごく刺激になった。
保護者等	学校での活動が発表できる機会があることを知りびっくりしました。これからもこのような活動が広がっていくことを望みます。

ユネスコスクールやESD活動の充実のために、必要だと思うこと

小学生	もっといろんな学校の活動を見ていろんな人に知ってもらったほうがいい。
中学生	一人一人の意識と地域・国際交流
高校生	まずは全体に知ってもらえるような宣伝活動をするべきだと思った。「ESD活動」という単語の意味すらよく分からなかった自分としてはどれも遠いことに感じられる。活動の輪を広げ、より大きくするために、自分と同世代の学生たちが何をしているのか皆が知っていくべきだと思う。
高校生	部活動や特定の学科だけでなく、学校全体で取り組むこと。
教職員	加盟校は意識して取り組んでいますが、それ以外の教師や子供たちはどれだけ知っているのか。知らない人も多いと思うので広げていくことが必要。
教職員	教員にもESD活動の普及。学校全体、県全体として取り組むような働きかけ。結局、興味のある人物だけに負荷がかかっている。
教職員	自分で考えたことを周りに発信する。なぜそれをしているのか、どうしていきたいのか主張する場を設ける。
教職員	横断的なカリキュラムの実践の中で、高めていく必要があると感じました。
一般参加者	小さくてもよいので、無理をしないで背伸びしないという意識で推進していただくのが良いと思います。



ユネスコスクール活動事例集 第6集

平成31年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話 052-954-6749 (ダイヤルイン)

ファックス 052-954-6962